

<b>Title</b>	現代において魂とは（共同研究報告：スピリチュアル・ケア研究）
<b>Author(s)</b>	中村, 準一
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.19-4 : 18
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2338">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2338</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 【スピリチュアル・ケア研究】 現代において魂とは

2009年10月22日、聖学院大学1号館F1コモン・ルーム室にてスピリチュアル・ケア研究会が開催された。参加者30名、同大学大学院教授片柳栄一氏から上記の表題について発表があった。

片柳氏は、ヘレニズム（ギリシア・ローマ）世界から発し、キリスト教的古代・中世を経て近代から現代へと至るヨーロッパ思想史をもとに、思想家の言説を分析しながら現代における魂の捉え方についての考察をおこなった。

ヘレニズム世界において魂は、(プラトンの作品にみるように) 生命の原理——魂（精神）と身体（物体）との対立ではなく、魂自体の上層と下層の対立のうちに捉えられる——であり、そのような上層—下層のアナロジーをあらゆる箇所にて、人間個人—社会—宇宙が一つの生命である全体=世界靈魂であると考えられていた。氏は、このような魂についての洞察が神の捉え方との相関でキリスト教的古代・中世に修正的に継承され、聖書やアウグスティヌスの言説に認められることを確認し、「生命の源泉としての魂」という発想が古代・中世思想の根源的な理解に必須のものであると同時に、それがとりわけR・デカルトとB・パスカルにおいて顕在化する近代以降の魂についての思考様式と決定的に異なる点であることを指摘した。

デカルトは『情念論』(Les Passions de l'âme, 1649)において、独立して能動的に身体に働きかけるものとしての〈情念〉を考察した。片柳氏は、デカルトにおいて身体と魂（精神）が、〈広がりを持つ事物〉(‘res extensa’)と〈考える事物〉(‘res cogitans’)として分離され、魂がもはや生命の原理ではなく、思考=理性の原理と見なされるに至り、またパスカルの〈考える葦〉(‘roseau pensant’)にもこれと同じ傾向の志向性(=思考の働きのなかに魂が発生すること)が認められると主張した。そして、とりわけパスカルにおいて顕著な特質とみなされる「自らの弱さを明視するための思考(pensées)」が現代的な魂の考え方の基盤であり、

あるいはこのことを意識することが魂についての思索の試金石となるとしたうえで、ヘレニズム、キリスト教的古代・中世、近・現代の魂観の総合的なあり方を探った。

結びとして、デカルトの〈コギト〉とパスカルの〈考える葦〉の考えを徹底させ、同時にそれを創造的に読み直す作業としての現代の魂観を例証する作品として、ベルグソンの『記憶と物質』(1896年)、E・フッサールの『デカルト的省察』(1929年)、M・ハイデガーの『存在と時間』(1927年) F・カフカの「掟の前で」(1914年)が挙げられ、それぞれの作品において魂がどのように捉えられているのかについて、氏の見解が紹介された。

(文責：中村準一 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)

(2009年10月22日、聖学院大学1号館1階コモン・ルーム)